

◆『戦史秘話』 第二話 ◆

## 大分に眠るドイツ兵がもたらした日独交流

～100年の時を超えて～

### 大分に眠るドイツ兵

その墓は、九州の大分市桜ヶ丘聖地にある。JR 大分駅から西方へ2キロほど、眼下に市街地を見下ろすことができる、緑と住宅に囲まれた閑静な墓地であり、多くの戦没者が眠っている。他の日本人の戦没者の墓とは異なり、墓標は西の方角を向いて建てられている。「ユリエウスパウル キーゼウエッテル之墓」。その墓にはこう刻まれていた。ドイツ海軍歩兵ユリエウス・キーゼヴェッター(Julius Kieseewetter)氏。1917(大正6)年5月9日没。彼は、祖国から9000キロも離れた大分の地に眠っている。私がこの墓のことを知ったのは、同氏の没後100年を経た2018年9月のことであった。



桜ヶ丘聖地(防衛研究所撮影)

キーゼヴェッター氏の墓

現在のJ. キーゼヴェッター氏の墓

(4面にはそれぞれ、「独逸俘虏」、「後備海軍歩兵卒」、  
「ユリエウスパウル キーゼウエッテル之墓」、「大正六年五月九日」  
と刻まれている。安松みゆき別府大学教授撮影・提供)

## ドイツ人留学生からの依頼

当時私は、東京市ヶ谷にある防衛研究所で、約 40 名の研修員と共に、約 9 か月の研修を受けていた。この研修には、外国からの研修員も参加しており、その一人が、ドイツ連邦共和国から派遣されたカーステン・キーゼヴェッター(Karsten Kiesewetter)大佐であった。私は、彼から、第一次世界大戦中に青島で日本軍の捕虜となり、大分市の捕虜収容所で 1917 年に死亡した曾祖父の弟の足跡をたどりたいとの相談を受けた。

## 足跡をたどって

防衛研究所には、旧帝国陸海軍に関する約 16 万冊の史料が保管されている。私は、「陸軍省大日記」(陸軍省が編集した公文書)の中に、捕虜情報局作成の日誌が綴られており、1917 年(大正 6)年 5 月 10 日の記載事項として、「大分収容所ヨリ左ノ電報アリ(五月九日 午後0時一三分発 同四時一分着)病氣中ノ俘虜卒キーゼウエッテル午前十時三十分死ス」との記述を発見した。(後掲資料を参照)

さらには、他の研修員の協力も得て、郷土史などを調べたところ、別府大学の安松みゆき教授が執筆した論文「大分にあったドイツ人俘虜収容所」に出会った。この論文は、大分収容所での日常生活を画才のあった捕虜が描いた作品集を中心として収容所の様子をわかりやすく描写したものであるが、なんとその論文の末尾に J. キーゼヴェッター氏の葬儀の様と現在の墓の様子が写真とともに描写されていたのである。

早速、安松教授に連絡をとったところ、都内で直接お会いする機会に恵まれた。留学経験もある安松教授は、キーゼヴェッター大佐とドイツ語で懇談、大分での墓の場所や様子を詳しく伺うことができた。さらに、墓石の拓本や大分での生前の姿を含むより鮮明な写真の提供を受けた。大分での J. キーゼヴェッター氏の姿と 1917 年に日本人の支援を得て戦友の手により実施された葬儀の写真(ドイツ日本研究所所蔵)は、100 年を超えて子孫の手に渡ったのであった。

## 日独の交流

2019年2月、キーゼヴェッター大佐の兄で、ドイツ連邦議会議員のローデリッヒ・キーゼヴェッター(Roderich Kiesewetter)氏が来日、防衛研究所を訪問した。J. キーゼヴェッター氏について説明を受けた同議員の目は潤み、「これまで詳しくわからなかった祖先の日本での様子がわかり嬉しく思う。一連の写真や史料に感動した」とのコメントがあった。



講演するキーゼヴェッター議員とキーゼヴェッター大佐(左端)  
2019年2月27日 防衛研究所にて(防衛研究所撮影)

その後、同議員は、研修員に対して、「ドイツの安全保障政策」と題する講義を行った。同議員は、法に基づく国際秩序が挑戦を受ける中で、共通の価値観を有する日独両国の協力関係の強化と進展を図っていくことが重要であると述べ、講義終了後には、研修員との間で活発な意見交換が行われた。

戦史史料と写真を契機として、研修員とキーゼヴェッター兄弟の間に強い心の絆が築かれたのである。こうしたささやかな出来ごとの積み重ねによる日独関係の強化と進展を大分に眠るJ. キーゼヴェッター氏が静かに見守っている。

キーゼヴェッター大佐は、折を見て、大分の地を訪問することを計画している。

(第66期一般課程研修員 1等海佐 長野晋作)

## コラム◆当時の捕虜収容所の様子

ドイツ人捕虜（当時は「俘虜」と称せられていた）収容所に関しては、徳島県の板東俘虜収容所が映画などに取り上げられるとともに、交響曲第9番が日本で初めて演奏された場所として、日本では有名であるが、大分を含め最盛期には11箇所あった板東以外の収容所については、あまり知られていない。中村彰彦は、小説『二つの山河』において、板東俘虜収容所長であった松江豊寿を主人公として、俘虜の人格を十分に尊重し、相当な自由を与えた管理体制を描いているが、安松教授の論文などからは、大分にあっても板東と同様の俘虜の人格を十分尊重した管理であったことがうかがえる。例えば、捕虜による自治がある程度認められるとともに、一定の条件下で外出や飲酒も許可され、週に1度のハイキングが何よりの楽しみであったとされている。また、小学校の運動会に捕虜が参加していたとの記録もあり、大分市民との交流があったとも考えられる。むしろ、これらの捕虜への寛大な管理は、国際法遵守を強く意識した当時の我が国の国情によるところが大きい。日独の交流史上の大きな意義を含むものである。なお、当時の捕虜収容所全体で捕虜から我が国に新たにもたらされたものとしては、先述の交響曲第9番のほか、バウムクーヘンやボトルシップなどが挙げられる。

### 関連資料

- ① J. キーゼヴェッター氏の葬儀関連写真(坂東コレクション)      ドイツ日本研究所  
[https://bando.dijtokyo.org/?page=object\\_detail.php&p\\_id=724](https://bando.dijtokyo.org/?page=object_detail.php&p_id=724)
- ② 陸軍省俘虜情報局編「俘虜写真帖」      国立国会図書館  
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/966639>
- ③ 大分市捕虜収容所関連文献  
・安松みゆき「大分にあったドイツ人俘虜収容所」『芸術学論叢』第18号(2009年)  
・安松みゆき「第一次大戦期のドイツ人俘虜生活と美術活動」『別府大学紀要』第46号(2015年2月)

<p>一、ローメンズ會社ハンスドレックハインヨリ大分收容所指名係虜、樂譜代金四圓五拾錢、福岡收容所指名係虜、マダラシヤ、五斤外六點、久留米收容所指名係虜、ハトリウム外二點、名古屋收容所指名係虜、アトポール外五點、直接寄贈シ度旨願出シテ以テ許可シタリ</p>	<p>一、曩ニ第六師團司令部ヨリ熊本俘虜收容所記事借用セシル用濟(贖馬シ置ケリ)ニ付返戻ス</p>	<p>五月十日(木曜日)</p> <p>一、大分收容所ヨリ左ノ電報アリ(五月九日午後四時三十分發)</p>	<p>病氣中ノ俘虜卒キーゼウエツテル午前十時三十分死ス</p> <p>(本俘虜八月下旬旬報記載ノ患者中ニナシ)</p>	<p>五月十一日(金曜日)</p> <p>一、伯林市獨逸銀行ヨリノ依頼ニテストックホルム市瑞西私立</p>
--	---	---	---	---

参考資料 J. キーゼヴェッター氏の死去に関する大分からの報告記録 (□部分)

簿冊名:「陸軍省大日記」

史料名:「大正6年自1月至6月 日誌6」

アジア歴史資料センター(<https://www.jacar.go.jp/>)レファレンスコード: C10073217000